

善珠『梵網經略抄』と引用典籍の問題 山口 敦史

一、『梵網經』注釈書と古代日本への伝来

奈良時代には、『梵網經』とその注釈書のうちのいくつかが舶載された。正倉院文書の時代範囲は、神龜四年（七二七）から宝龜七年（七七六）の四十九年間であり、奈良時代の漢訳仏典・仏教関係文献の舶載状況を知る有力な資料となる。

正倉院文書に見られる『梵網經』注釈書の書名は、現存するものが五種類。散逸書が三種類ある。

二、善珠『梵網經略抄』の引用典籍とその方法

善珠作製『梵網經略抄』には、多くの典籍が引用されている。研究史の上では、ほとんど太賢作製『梵網經古迹記』の引き写しであると断じた論も存在する。³しかし、それはやや極端な意見で、実際に『梵網經略抄』の本文を見てみると、多様な文献名・人名が散見される。ここで注意すべきは、それらの文献名・人名のうち、『梵網經古迹記』の中に見られるもの（善珠が孫引きをしているもの）と、『梵網經古迹記』の中に見られないもの（善珠は孫引きをせず、直接文献を見ている可能性がある

もの）とを、区別する必要があるということである。

以下に「A人名」「B典籍名」と分けて表示する。『梵網經古迹記』の中に見られるものは、『増補改訂日本大藏經』のページ数を記す。『梵網經古迹記』に見られないものは「古なし」と表記する。「§」のあとの数字は、大正藏第四十巻のページ数。

A 人名

①善珠『梵網經略抄』に引用されている「太賢」

（『増補改訂日本大藏經』第三十四巻、四十五頁から）

49上08 太賢法師云／50上02 太賢師云／51下10 賢云／52上12

賢云／52下07 大賢師云

②善珠『梵網經略抄』に引用されている「法藏」

62上07 法藏師云 §七〇五c 71下06 法藏師云 §七〇九b

84上15 法藏師云 §七一三c 85上03 法藏師云 §七一四a

85上07 法藏師云 §七一四a 89下12 法藏師云 §七一五b

92上12 法藏師云 §七一六c 92上16 藏寂同云 §七一七a

③善珠『梵網經略抄』に引用されている「法鏡」（統法師）³

50下02 統法師云 §古なし 52下10 統法師云 §古なし

55上08 銃法師 §古なし 56下12 銃云 §古なし
96下02 銃云 §古なし 96下11 銃云 §古なし
97上11 銃云 §古なし

④善珠『梵網經略抄』に引用されている「義寂」

52上08 寂法師云 §古なし 62上07 寂云 §七〇五c
68上13 義寂師云 §七〇八b 70上14 寂云 §古なし
88下10 寂云 §七一五b 89下13 寂云 §七一五c

⑤善珠『梵網經略抄』に引用されている「北井洲眞藏師」

47下16 北井洲眞藏師曰 §六九九b
81下17 北井洲疏云 §七一三a

B 典籍名

善珠『梵網經略抄』に引用されているその他の典籍（漢訳仏典除く）

49上09 西域伝云 §六九九c
53上04 雜論集云 §七〇一b（古迹記では「雜集云」）
58上13 涅槃音義云 §古なし
64下12 孔子曰 §七〇六c
68上13 元曉師云 §七〇八b
69下01 疏説 §古なし
71上16 念云 §古なし
71下10 集略云 §古なし
71下11 本草云 §古なし
74下06 法師云 §古なし
75上11 周礼云 §七一a

88上17 疏説 §古なし
89上01 旧疏 §古なし。義寂にあり（六八三b）
90上03 疏説 §古なし

このように、善珠は『梵網經古迹記』だけを見ていたとは断言できないと思われる。例えば「B 典籍名」の「89上01 旧疏」であるが、これは『梵網經古迹記』には見られず、義寂の『菩薩戒本疏』に本文が見られる。ここから、義寂『菩薩戒本疏』の奈良時代における日本舶載を推測することができ、善珠がそれを実見していた可能性を感じることもできる。もちろん、今日では散逸した大量の注釈書が存在を想定すれば、それら散逸注釈書などからの孫引きの可能性も当然考えられる。

ここで、実際の『梵網經』本文と、その本文に該当する諸注釈を挙げる。

①序説

【『梵網經』本文】（一〇〇四b）仏子諦聽。若受三仏戒者。國王王子百官宰相。比丘比丘尼。十八梵天六欲天子。庶民黃門淫男淫女奴婢。八部鬼神金剛神畜生乃至變化人。但解法師語。尽受得戒。皆名第一清淨者。

I 善珠『梵網經略抄』（日藏57～58）

此即第三所被弟子。言「比丘者先受三声聞」。有説。廻心受戒時転成「菩薩戒」。成非也。彼依「餘乘種子」立故。但前小戒有「助大力」。菩薩乘心別種子生。於「彼所熏」別起「無表

一。十八梵者色界衆也。謂三靜慮各有三天。第四有九故。無想初後。許有心。故。善戒經云。要先發菩提心方便受。苦薩戒。如何淨居亦得受戒。有說。十八言總意別。如一比丘名六群。有說。除無想淨居別有十八梵。如本業經。下三靜慮各有四天。第四六故。有說。掘実亦有二成仏。然唯識論總成色界有廻心。已傍述未建立廻向菩提聲聞教云。若依般若。不發大心。即五淨居無廻心者。不謂了義。亦無回心。於中且依受不共戒許。黃門等亦受得戒。庶民者無官位人。黃門者五種半釈迦。梵云般茶迦。此云黃門。黃約男女根故云門。涅槃音義云。取失根人而着黃衣令守王門。故名黃門。若遍學行。別受七衆。當知遮難。同聲聞受。有問。若黃門等亦受得戒。何故經云。若言不發優婆塞戒。沙彌戒。比丘戒。得菩薩戒。無有是處。譬如重樓。不由初級得第二級。無有是處。彼自解云。必由律儀得後不共二菩薩戒。故作是說。未必菩薩先發小心。皆名第一清淨者。如論起勝諸羅漢故。何故爾者。如般若云。二乘善根螢火唯照自身。大乘善根猶如日光。通一切故。

Ⅱ新羅・太賢『梵網經古迹記』(七〇二c)

述曰。此即第三所被弟子。言比丘者。先受聲聞。有說。廻心受戒時轉成菩薩戒。非也。彼依餘乘種子立故。但前小戒有助大力。菩薩乘心別種子生。於彼所熏別起無表。十八梵者色界衆也。謂三靜慮各有三天。第四有九故。無想初後許有心故。善戒經云。要先發菩提心方得受菩薩戒。如何淨居亦得受戒。

有說。十八言總意別。如一比丘名六群。有說。除無想淨居別有十八梵。如本業經。下三靜慮各有四天。第四六故。有說。掘実亦有成仏。然唯識論總成色界有廻心。已傍述未建立廻向菩提聲聞教。云若依般若不發大心即五淨居無廻心者。不謂了義亦無廻心。於中且依受不共戒。許黃門等亦受得戒。若遍學行別受七衆當知遮難同聲聞受。有問。若黃門等亦受得戒。何故經云。若言不發優婆塞戒沙彌戒比丘戒得菩薩戒。無有是處。譬如重樓不由初級得第二級。無有是處。彼自解云。必由律儀得後不共二菩薩戒故作是說。未必菩薩先發小心。皆名第一清淨者。如論超勝諸羅漢故。何故爾者。如般若言。二乘善根猶如螢火。唯照自身。大乘善根猶如日光。導一切故。

Ⅲ義寂『菩薩戒本疏』(大正藏四十、六六三b)

黃門者五種半釈迦。畜生乃至變化人者。謂畜生中能變化者。但解法師語盡受得戒者。此所列中若能領解法師語亦能發菩提心。皆得受戒也。又在家戒如上所說。解語皆受。若出家戒則不如是。唯人趣中若男若女無遮難者。方許為受。義同聲聞出家受法。又應戒法皆得通受。文無簡故。但應遮其比丘等性。如半釈迦。許受五戒。但應遮近事男性。序文已訖。

善珠『梵網經略抄』での傍線は、太賢『梵網經古迹記』の引用。波線は義寂『菩薩戒本疏』の引用である。一目でわかるように太賢からの引用が大部分だが、ここでは線の引かれていない箇所注目したい。

「黃門」の解釈が問題になる。善珠は義寂を引用しながら、ま

ず「黄門は五種の半扞迦⁷⁾」と記述する。「半扞迦」とは「男根の不具者⁸⁾」とされるが、さらに、太賢・法藏とも説明していない。「黄門」のさらなる解釈に踏み込んでいく。「梵云般荼迦。此云「黄門」」とあるのは「般荼迦、此云「黄門」」を参考にしたものであろう。善珠のいう「此」は、「梵」以外の地、つまり中国とも日本とも（あるいは新羅とも）受け取ることができるとも。

善珠は、さらに現在散逸の「涅槃音義」を引用し、「黄門」がいわゆる宦官であることを示す。ここに、八世紀の日本に中国・新羅等の現実である〈宦官〉が立ち現れることになる。

宦官の害毒・悪辣ぶりは、范曄「宦者伝論」（『文選』巻五十所収）、『後漢書』宦者列伝第六十八などにある。「国を敗り政を蠹⁹⁾むの事、単くし書す可からず（国家を損ない政治をむしばむさまは、到底書き尽くすことはできない）」と『後漢書』にある。「黄門」が宦官の意味であることは、『後漢書』の用例からも言える。「涅槃音義」については不明だが、複数の著者の『涅槃音義』がかつて存在したと考えられる。

② 第四輕戒

【『梵網經』本文】若仏子。不得食¹⁰⁾五辛¹¹⁾。大蒜。草葱。韭葱。蘭葱。興渠。是五種一切食中不得¹²⁾食。若故食者。犯¹³⁾輕垢罪¹⁴⁾（七〇九b）

Ⅰ 善珠『梵網經略抄』（日藏71）

第四食五辛戒。五辛雖¹⁵⁾草臭穢難¹⁶⁾親。賢良所¹⁷⁾避。所以制¹⁸⁾之。法藏師云。今此五中。大蒜家蒜也。有人說。韭葱是胡葱。蘭

葱是家葱。上三是人間常食。草葱爾雅云¹⁹⁾「山葱」也。茎細葉大。應²⁰⁾為²¹⁾「茗字」。革者非也。北地有。江南無。或云。草葱是薺葉似²²⁾悲而痺。倭言奈壳弥。良薺音下戒反。集略云似²³⁾薺而長。白色。本草云。韭味辛酸無²⁴⁾毒。安²⁵⁾五臟除²⁶⁾胃熱。倭言多大美良。渠者。五辛經中云。苔台。是倭言乎治舌。有說。江南葉似²⁷⁾野蒜。根茎似²⁸⁾韭。北地所²⁹⁾無。如是五辛除³⁰⁾自重病³¹⁾。及有³²⁾利益³³⁾。餘不得³⁴⁾食。如³⁵⁾文殊問經云。不得³⁶⁾得³⁷⁾嗽³⁸⁾蒜。若有³⁹⁾因緣⁴⁰⁾得⁴¹⁾嗽。若合⁴²⁾藥治⁴³⁾病。得⁴⁴⁾用。又華嚴云。我身中有⁴⁵⁾二八萬戶虫⁴⁶⁾。我安彼安。我身飢苦。彼亦飢苦。是故菩薩有⁴⁷⁾所⁴⁸⁾服食⁴⁹⁾。皆為⁵⁰⁾諸虫欲⁵¹⁾令⁵²⁾安樂⁵³⁾。不⁵⁴⁾貪⁵⁵⁾其味⁵⁶⁾。由⁵⁷⁾此明知若有⁵⁸⁾因緣⁵⁹⁾得⁶⁰⁾一敢無⁶¹⁾犯。

Ⅱ 新羅・太賢『梵網經古迹記』（四十、七〇九b）

述曰。五辛雖草。臭穢難親賢良所避。所以制之。法藏師云。今此五中大蒜家蒜也。有人說。韭葱是胡葱。蘭葱是家葱。上三是人間常食。草葱。爾雅云山葱也。茎細葉大。應為茗字。革者非也。北地有江南無。其興渠。有說苔台。然未見文。有說。江南葉似野蒜。根茎似韭。北地所無。又⁶²⁾阿魏藥⁶³⁾梵語名興渠。伝説如是。如是五辛除自重病及有利益餘不得食。如文殊問經云。不得嗽蒜。若有因緣得嗽。若合藥治病得用。又華嚴云。我身中有八萬戶虫〔正法念經云一戸九億〕。我身安樂彼亦安樂。我身飢苦彼亦飢苦。是故菩薩有所服食。皆為諸蟲欲令安樂。不貪其味

Ⅲ 義寂『菩薩戒本疏』（大正藏四十、六七二a）

薰臭妨浄法故制。大小俱制七衆亦同。准律。女応小重。以発華色故。革葱土葱蘭葱者。此中無薤韭。但開葱為三。此三別相難知。或云。革葱是薤葉似韭而厚。蘭葱者。伝説嶺南生蘭葱。葉似大蒜而闊臭氣同蒜。興渠者。婆羅門語喚芸台為菹渠。慮西域諸寺不聽食也。又云。嶺南生興渠。形似倭韭氣味似蒜。若有病餘藥不治。或応開之。如律身子行法。菩薩亦応開之。別有五辛經一卷。五辛各五。合二十五。又云。噉辛故。入東方阿鼻。上流洗辛下流洗衣亦不得云云。此三戒撰善中無別相。以義撰之。於身語意住不放逸中亦蘊在也

Ⅳ法藏『梵網經菩薩戒本疏』（大正藏四十、六三六c）

（略）八釈文中有三。初総制。二大蒜下別制。此中五辛与餘処別。餘処有韭蘭葱蒜及興渠為五。此文五中大蒜可知。有人説。葱葱是胡葱。蘭葱是家葱。上三是人間常食。革葱是山葱。北地有江南無。其興渠。有説芸台是也。然未見説文。有説。江南有葉似野蒜草。根茎似韭。亦名薤子。無子北地所無也。又釈其阿魏藥梵語名興渠。將謂是此辛臭物之苗葉。三若故下違制結犯

太賢は法藏から解釈の多くを負っている。善珠は主に太賢の
みを見て書いたと思われる。そこで「阿魏薬は梵語。興渠と名
づく。伝へ説くことはくの如し」という箇所を、「倭には○○
○と言ふ」という和訓と「本草」などの引用で置き換えている。
太賢注釈で行われている〈梵→漢〉の翻訳を、善珠は自国の現
状に合わせ、〈漢→倭〉への翻訳を行っている。このことは、「梵」

との関わりによって「漢」の世界が成立し、さらに「和（倭）」
の形成にもつながる、という主張と通底するものを感じる。

三、おわりに

〈善珠は太賢をまるうつしただけ〉という主張は、明らかに誇張で、善珠は太賢に多く依りながらも、義寂・法銚の注釈を手元に置いて、自分で取捨選択しながら参照・引用している。法藏はほぼ太賢からの引用で、実際に参照していなかった可能性がある。

このように、具体的に先行注釈書の日本舶載の有無がわかるという点は、奈良時代の仏典注釈研究のひとつの意義と言えるだろう。しかし、ことはそれだけではない。〈大部分引用〉が事実だとして、引用しているから「無価値」と言えるのかどうか、という問題もある。まず、先行注釈書の引用は中国・朝鮮半島の学僧も行っていることで、善珠は積極的にその系譜につらなろうというつもりだったのであろう。

仏典注釈は中国・朝鮮半島・日本と、記述を継承しながら、解釈を加えていく。そのことによって注釈としての〈型〉を踏襲していると云えるが、また、新たな記述（注釈の言語）を導入することによって、その地域・風土に根ざした（ダイナミズム）が生まれているとも言いうる。「梵云○○○」という〈型〉から「倭言○○○」という新たな〈型〉が生まれたり、「黄門」に「宦官」という新たな意味が付与されて、注釈の言語が変容することなどは、その例である。それが地域・風土の必要に根ざした仏の教えの実践と考えたのではなからうか。

注(1)

榮原永遠男「万葉集をめぐる仏教的環境―正倉院文書と万葉集―」(『萬葉』第百八十七号、二〇〇四年五月)。

(2) 拙稿「善珠『梵網經略抄』から見る「姪」と「呪術」の認識―唐・新羅作製『梵網經』注釈との関連―」(『古代文学』第四十五号、二〇〇六年三月)参照。なお、『梵網經略抄』についての先行研究としては、小林真由美「日本靈異記」と『梵網經略抄』(『仏教文学』第二十六号、二〇〇二年三月)がある。

(3) 石田瑞磨「『梵網戒經』の注釈について―道璿・法進・善珠をめぐる―」(『日本仏教思想研究』第二卷、戒律の研究下、法蔵館、一九八六年。初出は一九七二年)。同『梵網經』(仏典講座14、大蔵出版、一九七一年)。

(4) (3)前掲論文には「統法師」は「法統」のことだと説く。

(5) 新羅僧・義湘の十大弟子の一人として「眞藏」の名が見える(『三国遺事』卷第四、義解第五)。同一人物か(津田博幸氏の指摘)。十大弟子のなかには「義寂」の名前も見えるので、その可能性は高い。

(6) (3)前掲論文もその可能性を指摘している。

(7) 「釈迦」とあるのは本文の誤りと思われる。

(8) 『織田佛教大辞典』による。『阿毘曇毘婆沙論』卷第三「黄門般叱」(有「男形」不能「男」、有「女形」不能「女」無形「二形」(大正蔵二十八、二四c)の用例は『漢語大詞典』にある。

(9) 玄応「一切経音義」卷十七「般叱」の項目。『国学基本叢書』(台湾商務印書館、一九六八年)には「釈元応撰」とある。

(10) 中国の宦官については、三田村泰助『宦官』(中公新

書、中央公論社、一九六三年)、桑原隲藏「支那の宦官」(『桑原隲藏全集』第一卷、岩波書店、一九六八年。初出は一九二三年)に詳しい。ちなみに、日本での「黄門」の用例としては、『三五絵』下巻、長谷善隆成に「梵網經」引用の形で登場する。

(11) 『漢語大詞典』には、「黄門」を「宦者。太監」とする例として、嵇康「与山巨源絶交書」(『文選』卷四十三)、『三国志』呉志・陸凱伝が挙げられている。しかし南方熊楠は、『後漢書』の段階で、すでにその意味合いで使用されていると指摘する(『鳥を食うて王になった話』『南方熊楠全集』別巻一、平凡社。初出は一九二二年)。「地突き唄の文句」『全集』第五卷。初出は一九三四年)。

(12) 日本・観静『孔雀経音義』(大正蔵六十一、七七六c)、日本・安然『悉曇藏』(大正蔵八十四、四一一a)には「玄応涅槃音義」とあり、日本・玄日『天台宗章疏』には「涅槃音義一卷行満述」「涅槃音義一卷法宣述」(大正蔵五十五、一三六b)とある。また、名古屋・七寺所蔵「古聖教目録」には法詮・行満撰の「涅槃音義一卷」、行信撰「涅槃音義六卷」があり、「一切経論律章疏集并私記」には行満述の「涅槃経音義一卷」がある(落合俊典編『中国・日本経典章疏目録』大東出版社、一九九八年)。

(13) 新川登亀男『漢字文化の成り立ちと展開』(山川出版社、二〇〇二年)、金文京『漢文と東アジア―訓読の文化圏』(岩波新書、二〇一〇年)参照。